



No. sma0059

(2022.11.10)

サントリー美術館  
「没後190年 木米」開催

会期：2023年2月8日（水）～3月26日（日）



重要文化財 兎道朝漱図 木米 一幅  
江戸時代 19世紀 個人蔵  
【展示期間：3/1～3/26】



重要文化財 染付龍濤文提重 木米 一具  
江戸時代 19世紀 東京国立博物館  
Image: TNM Image Archives  
【通期展示】

サントリー美術館（東京・六本木／館長：鳥井信吾）は、2023年2月8日（水）から3月26日（日）まで「没後190年 木米」を開催いたします。

江戸時代後期の京都を代表する陶工にして画家である文人・木米（1767～1833）は、京都祇園の茶屋「木屋」に生まれ、俗称を「八十八」と言います。木屋あるいは氏の「青木」の「木」と、八十八を縮めた「米」に因んで「木米」と名乗りました。また、中年に耳を聾したことに由来する「聾米」のほか、「龍米」「九々鱗」「青來」「百六山人」「古器觀」などの号があります。

木米は、30代で中国の陶磁専門書『陶説』に出会い、これを翻刻しつつ本格的に陶業に打ち込みました。その作品は、優れた煎茶器から茶陶まで、多岐にわたります。熱心な古陶磁研究を土台に広い視野をもち、古今東西の古陶磁の美と美を、因習を越えて結びつけ新しい美をひらいていく創造性が木米のやきものにはあらわれています。

一方、木米がとりわけ50代後半から精力的に描いた絵画は、清らかで自由奔放な作風が魅力的です。その多くは友人への贈り物とした山水図であり、交友関係や木米自身の人柄を想像しながら鑑賞すると、より一層味わい深く感じられます。

さて、文人・木米を知る上で欠かせないものは、その壮大な遺言でしょう。「これまでに集めた各地の陶土をこね合わせ、その中に私の亡骸を入れて窯で焼き、山中に埋めて欲しい。長い年月の後、私を理解してくれる者が、それを掘り起こしてくれるのを待つ」と言ったと伝わります（田能村竹田『竹田荘師友画録』）。

本展では、当時の文人たちが憧れた木米の個性あふれる屈指の名品を一堂にご紹介いたします。木米の陶磁、絵画、交友を通して、その稀有な生涯と木米芸術の全貌に触れる貴重な機会となります。

### [文人とは?]

木米が生きた時代の日本における「文人」は、中国の文人の詩書画三絶の世界に憧れをもち、中国の学問や芸術の素養を身に付けた人々です。彼らは独自の文人ネットワークを構築して活発に交流し、お互いの個性を尊重しながら思い思いに文人としての生き方を追求しました。

## 《 展示構成 》

### 第一章： 文人・木米、やきものに遊ぶ



染付輪花形浙江名勝図皿 木米 一枚  
文化6年（1809）  
個人蔵 【通期展示】



三彩鉢 木米 一口  
文化4～5年（1807～1808）  
サントリー美術館 【通期展示】

木米のやきものは、中国、朝鮮、日本の古陶磁に着想を得ています。しかしいかなる古陶磁も、その外見を忠実に写し取るのみにとはとどまりません。中国の書籍や古器の鑑賞から得た中国陶磁の豊富な知識を基にして、さまざまな古陶磁から形や文様的一部分を抜き出し、それらを独自の視点で再構成しています。こうした大胆な姿勢から、強い個性と不思議な魅力をもつ木米のやきものが生まれました。

木米は10代の頃から偉大な文人・高芙蓉<sup>こうふよう</sup>（1722～1784）のもとで篆刻などを習い、また古器物の鑑賞を好み、文人としての修養を積みました。そして自ら望んで陶業を始めたのです。木米は奥田穎川<sup>おくだえいせん</sup>（1753～1811）に師事し、同時代の京焼陶工たち（欽古堂亀祐<sup>きんこどうかめすけ</sup>、仁阿弥道八<sup>にんなみどうはち</sup>など）と切磋琢磨します。また

30代で出会った『陶説』を翻刻しつつ作陶の糧としました。さらには京都栗田青蓮院の御用焼物師を許され、名工として異才を放っていきます。

本章では、いろいろな古陶磁の要素が木米の視点によって因習にとらわれず自由にブレンドされたやきものをご紹介します。形に、色に、文様に、時には箱書にもあらわれた文人・木米の「遊び」と個性をお楽しみください。

### 【主な出品作品】

- ・『陶説』（下巻） 木米校 一冊 天保6年（1835）跋  
東京藝術大学附属図書館（協本文庫）
- ・重要文化財 染付龍濤文提重<sup>りゅうとうもんさげじゅう</sup> 木米 一具 江戸時代 19世紀  
東京国立博物館
- ・染付輪花形浙江名勝図皿 木米 一枚 文化6年（1809） 個人蔵
- ・鉄釉茄子形土瓶 木米 一合 江戸時代 19世紀 個人蔵
- ・三彩鉢 木米 一口 文化4～5年（1807～1808）  
サントリー美術館

## 第二章： 文人・木米、煎茶を愛す



紫霞風爐 木米 一基  
文政7年（1824）  
個人蔵 【通期展示】



金欄手花鳥文煎茶碗 木米 五口  
江戸時代 19世紀  
早稲田大学會津八一記念博物館（富岡重憲コレクション）  
【通期展示】

本章では、木米の煎茶器を特集します。18世紀の半ば、売茶翁<sup>ばいさおう</sup>（1675～1763）が煎茶道具を担いで洛中洛外の景勝の地を選び移動茶店を開き、道行く人々に一杯の煎茶をすすめました。その去俗の生き様は、木米世代の文人たちにも多大な影響を与えます。煎茶は文人の自己表現である詩書画の制作や鑑賞の場と強く結びついた存在になり、京都、大坂を中心に、身分の違いに関わらず広がります。さらには、芸道としての煎茶道も成立しました。

このような煎茶流行の時代、木米は涼<sup>りょうろ</sup>炉（=湯を沸かす焜<sup>くわ</sup>）や急須、煎茶碗などを作り30代の頃からすでに好評を得ていました。例えば『煎茶早指南<sup>せんぢやほやしなん</sup>』（享和2年〔1802〕刊）の中で、木米の煎茶器が「唐物写しに妙を得たるものなり」と評価されていることからその名声の一端がうかがえます。

中国陶磁を中心にいろいろな古陶磁の要素を自由に換骨奪胎する木米の「遊び」は、煎茶器にも遺憾なく発揮されました。とりわけ、煎茶道花月菴流の祖・田中鶴翁（1782～1848）のために木米が制作した煎茶器に顕著にみられるように、中国の唐～宋時代の茶詩（=茶を主題とした詩）を器表にびっしりと記した文芸の香り高い涼炉や煎茶碗には、自らも煎茶を愛する文人であった木米の個性が強く表出しており、目を奪われます。

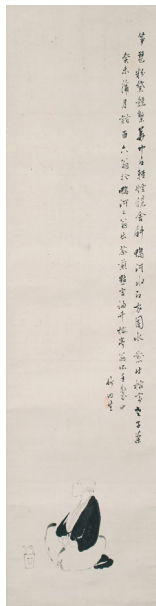
### 【主な出品作品】

- ・紫霞風爐<sup>しかふろ</sup> 木米 一基 文政7年（1824） 個人蔵
- ・白磁鳳凰文急須 木米 一合 江戸時代 19世紀 個人蔵
- ・三島手急須 木米 一合 江戸時代 19世紀 個人蔵
- ・金欄手花鳥文煎茶碗 木米 五口 江戸時代 19世紀

早稲田大学會津八一記念博物館（富岡重憲コレクション）

- ・鉄絵唐草文茶壺・青磁梅花文茶壺 木米 二合 江戸時代 19世紀 個人蔵

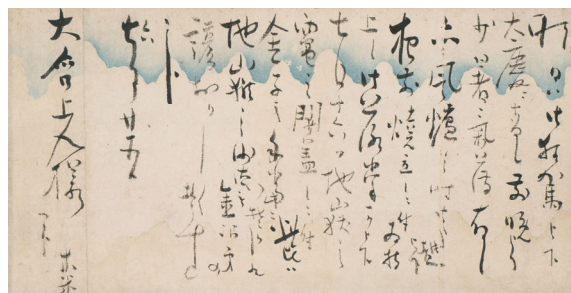
### 第三章： 文人・木米と愉快的仲間たち



木米喫茶図 田能村竹田 一幅

文政6年（1823）

個人蔵 【展示期間：2/8～2/27】



雲華上人宛書状 木米 一幅

江戸時代 19世紀

個人蔵 【展示期間：3/1～3/26】

本章では、文人・木米の魅力を「交友」という視点から掘り下げます。

例えば、親友で画家の田能村竹田（1777～1835）は「木米の話は諧謔を交え、笑ったかと思えば論ず、真実かと思えば嘘というように、奥底が計り知れない」と伝えています（『竹田荘師友画録』）。竹田に語った壮大な遺言もまた、陶業への深い愛着や文人としての矜持を、冗談めかして表明したものかもしれません。

竹田のほか、儒学者の頼山陽（1781～1832）、僧の雲華（1773～1850）、蘭方医の小石元瑞（1784～1849）といった人々は、木米が晩年に親交した当代一流の文人でした。年若い彼らの中であって、文字に通じた「識字陶工」として博識で知的ユーモアにあふれた木米は、あたたかな尊敬の眼差しを向けられていたようです。

主な展示作品は、木米が気の置けない友人たちへ宛てた書状や、「古器観」とも号した木米ならではの旧藏品、木米が陶工として名を馳せる前に薫陶を受けた文人らに関する資料などです。交友を通して立ち上がる木米の人物像は、現代の私たちの心をも惹きつけてやみません。

#### 【主な出品作品】

- ・『竹田荘師友画録』（稿本） 田能村竹田 二冊 天保4年（1833）  
大分県立美術館（片岡辰市コレクション）
- ・木米喫茶図 田能村竹田 一幅 文政6年（1823） 個人蔵
- ・雲華上人宛書状 木米 一幅 江戸時代 19世紀 個人蔵
- ・小石元瑞宛書状 木米ほか 一卷 江戸時代 19世紀 究理堂文庫
- ・蓬萊硯 洮河緑石 一方 中国・明時代 15～16世紀

静嘉堂文庫美術館



#### 第四章： 文人・木米、絵にも遊ぶ



聴濤図 木米 一幅 文政9年（1826）  
 公益財団法人脇村奨学会  
 【展示期間：2/8～2/27】



重要美術品 化物山水図 木米 一幅  
 文政12年（1829）  
 個人蔵 【展示期間：3/1～3/26】

木米は、中国的な教養のひとつとして若い頃より絵画も嗜んでいましたが、制作年の判明する作品は、とりわけ50代後半以降に集中しています。人生も晩年において、木米が芸術活動の幅を広げた背景には、身分や年齢を問わず京都に集った文人たちと刺激し合う中で、諸芸に秀でた文人としての生き方を改めて自覚した可能性が想像されます。

木米の絵画の特徴は、主題の大半を山水図が占めること、そして何より「<sup>ためがき</sup>為書」すなわち誰かの為に描いた作品が多いことが挙げられます。為書のある作品はいわば、その人物へ宛てた木米の私信のようなものです。例えば、くすんでいながらも、何とも言えない透明感にあふれた淡彩の山水図を前にして、一筋縄ではいかない木米の人柄へ親しく思いを馳せることもまた、木米画ならではの楽しみ方と言えます。

本章では、現存作例の中でも最初期の山水図や、茶の聖地・宇治の実景に基づく悠大な山水図、希少な花卉図や仏画の名品などを通して、多くの文人たちに愛された木米画の魅力を紐解きます。

#### 【主な出品作品】

- ・高士観瀑図 木米 一幅 寛政10年（1798） 個人蔵
- ・重要文化財 騰龍山水図 木米 一幅 文政6年（1823） 個人蔵
- ・聴濤図 木米 一幅 文政9年（1826）

公益財団法人脇村奨学会

- ・重要美術品 化物山水図 木米 一幅 文政12年（1829） 個人蔵
- ・重要文化財 兎道朝激図 木米 一幅 江戸時代 19世紀 個人蔵

**【本展における展覧会関連プログラム】**

◎学芸員による展示レクチャー

展覧会担当学芸員が詳しく展示作品を解説（スライド使用）

日時：2023年2月19日（日）、3月12日（日）

各日11時～、14時～（各回約40分）

参加無料（別途要入館料）／事前申込優先

※当館ウェブサイトよりお申込みください。先着順。空席がある場合に限り、当日参加可能です。

◎その他のプログラムも決定次第当館ウェブサイトでご案内します。

※変更・中止の場合があります。詳細および最新情報は当館ウェブサイトをご覧ください。

## 「没後190年 木米」展

- ▼会 期：2023年2月8日（水）～3月26日（日）  
※作品保護のため、会期中展示替を行います。  
※会期は変更の場合があります。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。
- ▼主 催：サントリー美術館、朝日新聞社
- ▼協 賛：三井不動産、三井住友海上火災保険、サントリーホールディングス
- ▼会 場：サントリー美術館  
東京都港区赤坂9-7-4 東京ミッドタウン ガレリア3階  
交通機関（東京ミッドタウン [六本木] まで）  
都営地下鉄大江戸線六本木駅出口8より直結  
東京メトロ日比谷線六本木駅より地下通路にて直結  
東京メトロ千代田線乃木坂駅出口3より徒歩約3分

### 【基本情報】

- ▼開館時間：10時～18時  
※金・土および2月22日（水）、3月20日（月）は20時まで開館  
※いずれも入館は閉館の30分前まで  
※開館時間は変更の場合があります。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。
- ▼休 館 日：火曜日（ただし3月21日は18時まで開館）
- ▼入 館 料：  
・当 日 券：一般1,500円、大学・高校生1,000円、中学生以下無料  
・前 売 券：一般1,300円、大学・高校生800円  
※サントリー美術館受付、サントリー美術館公式オンラインチケット、ローソン  
チケット、セブンチケットにて取扱  
※前売券の販売は11月30日（水）から2月7日（火）まで  
※サントリー美術館受付での販売は開館日のみ
- ▼割 引：  
・あ と ろ 割：国立新美術館、森美術館の企画展チケット提示で100円割引  
※割引適用は一種類まで（他の割引との併用不可）



▼呈茶席（お抹茶と季節のお菓子）

日 時：2月9日（木）・23日（木・祝）、  
3月2日（木）・16日（木）・23日（木）  
12時、13時、14時、15時にお点前を実施  
（お点前の時間以外は入室不可）

会 場：6階茶室「玄鳥庵」 定員：各回12名／1日48名

呈茶券：1,000円（別途要入館料）

※呈茶券は当日10時より3階受付にて販売（予約不可、先着順で販売終了、お一人様  
2枚まで）

※変更・中止の場合があります。詳細および最新情報はウェブサイトをご覧ください。

▼一般お問い合わせ：03-3479-8600

▼美術館ウェブサイト：<https://www.suntory.co.jp/sma/>

▽プレスからのお問い合わせ：

サントリー美術館〔学芸〕安河内・久保〔広報〕光田

[https://www.suntory.co.jp/sma/info\\_press/](https://www.suntory.co.jp/sma/info_press/)

▽広報画像のお申込み：

「没後190年 木米」展広報事務局（株式会社TMオフィス内）

〔担当〕馬場、永井、西坂

TEL : 06-6231-4426

E-mail : mokubei@tm-office.co.jp

以 上